

10 転作大豆推進のための営農類型別選択指針

—水田地帯を対象として— (農試経営科)

(1) 背景とねらい

水田地帯の大豆転作を推進している市町村の1センサス集落を対象に、農家の営農類型別に転作大豆選択の特徴を経営耕地面積、労働力利用形態の側面から解析した。その結果、転作大豆推進のための指針となり得るので指導上の参考に供する。

(2) 技術内容

1) 営農類型別転作物選択の行動

営農類型	転作物選択の行動
I 稲作単一	○農業のみ就労者のいる農家は大豆中心の選択 ○農業のみ就労者のいない農家は飼料作物の選択
II 稲作・小規模肉牛	○総じて飼料作物の選択 ○経営耕地面積の大きい農家は大豆も合わせて選択
III 稲作・酪農 IV 稲作・大規模肉牛	○飼料作物の選択
V 稲作・養豚	○就農者の多い農家は園芸作物の選択 ○経営耕地面積の大きい農家は大豆も合わせて選択
VI 稲作・園芸	○総じて園芸作物の選択 ○経営耕地面積の大きい農家は大豆も合わせて選択
VII 稲作・たばこ 小規模肉牛	○飼料作物と大豆の複数選択

2) 転作物として大豆の選択が可能な農家類型

- ① 稲単作と兼業とが結びついた農家で、農業のみ就労者のいる農家。
- ② 稲作・小規模肉牛と兼業が結びついた農家で、経営耕地面積の大きい農家。
- ③ 稲作・養豚経営で、経営耕地面積の大きい農家
- ④ 稲作・野菜・花き経営で、経営耕地面積の大きい農家。
- ⑤ たばことの複合農家は、たばこ作の調理作業と大豆作の収穫・脱穀・調製作業との労働競合を回避出来る条件があれば、大豆選択が可能である。

(3) 指導上の留意事項

- 1) 水田条件が大豆作に適していること。すなわち、転作圃場選択や転作大豆栽培管理が個別対応で可能なこと。
- 2) 本格的な大豆転作の経験を持ち合わせていない農家間の土地生産力の高低が予想されるため、推進側(直接的には市町村・農協・普及所等)の技術指導、援助が必要不可欠である。

(4) 試験成績の概要

- 1) 試験課題名：水田転作を基調とした自立経営成立発展の方式
- 2) 試験年次・場所：昭和53～55年、農業試験場 経営部

別紙資料 ① 営農類型別転作物選択の特徴と背景

営農類型 (商品作)	転作物選択の特徴	転作物選択の背景
<p>I 稲作単一 (米)</p>	<p>経営耕地面積の大小により、転作物の選択が規定されているとはいえない。</p> <p>農業のみ就労者のいる農家は、大豆から野菜としての枝豆への転換志向があらわれている。</p> <p>農業のみ就労者のいない農家は、飼料作物の選択行動がみられ、その転作物を有畜農家へ提供している。</p>	<p>高齢者、および婦女子の農業のみ就労者の余剰労力の活用ということから、大豆選択がなされている。</p> <p>大豆から枝豆への転換の背景は、枝豆収入(販売収入+一般作物転出作奨励金)が、大豆作よりも有利性がみられるためである。(聞き取りによると、枝豆の所得は昭和54年度で10アール当たり10万円程度である。)</p> <p>飼料作物選択農家は、減反政策による農家経済への影響が小さいため、経営内に取り入れない形の対応をしている。</p>
<p>II 稲作・小規模肉牛 (米・子牛か 肥育牛1~2頭)</p>	<p>総じて飼料作物の選択志向がみられるが、経営耕地面積の大きい農家は大豆選択の行動がみられる。</p> <p>また、転作飼料を活用するために肉牛部門の拡大志向がみられる。</p>	<p>経営耕地面積の大きい農家は、転作割り当て分全てに飼料作物を作付けると、その利用余剰を生じる。そこで、兼業と就労状態が競合しにくい大豆を選択している。</p>
<p>III 稲作・酪農 (米・牛乳)</p> <p>IV 稲作・大規模肉牛 (米・肥育牛)</p>	<p>飼料作物を選択している。</p>	<p>粗飼料基盤が脆弱なため、飼料自給率の向上をねらいとした転作物を選択している。</p>

別紙資料 ① 営農類型別転作物選択の特徴と背景（つづき）

営農類型 (商品作)	転作物選択の特徴	転作物選択の背景
V 稲作・養豚 (米・子豚・肉豚)	家族就農者の多い農家は園芸作物の選択行動がみられ、経営耕地面積の大きい農家は大豆も合わせて選択している。	稲作・養豚の2作目だけでは、家族就農者の多い農家は時期的に労働力余剰を生じることから、新規作物（園芸作物）を選択している。また、経営耕地面積の大きい農家は転作割り当て分、全てに園芸作物を選択すると、労働力不足をきたすことから、労力調整をねらいとした大豆を合わせて選択している。
VI 稲作・園芸 (米・やさい・花き)	総じて園芸部門の拡大傾向がみられ、経営耕地面積の大きい農家は大豆選択の行動がみられる。	園芸部門の規模は、所有労働量に規定されることから、転作割り当ての多い農家は労力調整作物として大豆を選択している。
VII 稲作・たばこ 小規模肉牛 (米・たばこ 肥育牛1~2頭)	飼料作物と大豆の選択行動がみられるが、大豆から枝豆への転換もみられる。	たばこの収納期日にもよるが、たばこの調理作業と大豆の収穫・脱穀・調製作業との労働競合が起ちであり、大豆を選択する場合は、たばこの調理作業の委託とか、大豆から枝豆への転換をはかっている。また、労働競合への対応はたばこ作を優先する意向である。

② 10a 当たり大豆生産費と所得算定式（一事例）

単位：円			
費目	金額	費目	金額
種苗費	1,724	賃料料金	4,670
肥料費	17,410	農機具費	2,502
薬剤費	3,568	労働費	24,058
光熱動力費	985	計	60,515
諸材料費	300	(うち自給分)	(34,358)
土地改良・水剝費	5,298	(労働時間)	(53.6時間)

所得算定式

$$Y = 260 X - 36,457 \text{ 円}$$

(Kg 当り単価) (家族経営的)

Y : 10a 当り所得(円)

X : 10a 当り大豆収量(Kg)

(参考)

(1) 所得0 (Y=0) になる10a 当り大豆収量 140 Kg

(2) 純収益0° になる10a 当り大豆収量 233 Kg